

〔第32回学術集会 オンデマンド講義〕

患者・家族を支え、実践を変える実装研究の動向 —米国での取り組みを中心に—

オレゴン健康科学大学

和泉 成子

傷病を持つ患者とその家族を支えるための介入を開発・検証する研究が多く行われているが、研究で有効性が検証された介入が日常の実践の中に取り入れられ患者・家族へのケアの向上につながっている例は少ない。また厳密な研究の結果として有効であるとされた介入が、実際の現場では効果的ではないというケースも見られる。この研究-実践間のギャップを埋め、研究で検証されたエビデンスを日常の実践の中に取り入れるための方法や方略を科学的に検討する実装研究が関心を集めている。実装研究の中では、導入しようとするエビデンス、導入先となる臨床現場の内的及び外的要因、導入に関与する臨床家、介入の受け手となる対象者などの特質を検討し、導入を阻害している要因を明らかにしてそれを取り除く、あるいは導入を促進する要因を明らかにし、それを増強することための方略を探ることに焦点をおいている。本演題のなかでは、米国の慢性疾患を有する患者とその家族へのケアマネジメン

トプログラム開発研究を例に、患者家族と現場の実情を考えながら実践を変える実装研究について解説・議論する。

略歴

和泉成子（いずみしげこ）、PhD, RN, FPCN

オレゴン健康科学大学看護学部Professor

千葉大学看護学部を卒業後、米国カトリック大学にてMaster of Science in Nursing, オレゴン健康科学大学にてPhDを修得。日米の看護系大学で教員を務め、現在オレゴン健康科学大学にてProfessor。専門研究領域は緩和ケア、高齢者ケア、医療システムとサービスモデルの開発、評価。現在はアドバンスケアプランニングの臨床現場への実装、および看護師主導によるプライマリーケアの普及を通して高齢・重症患者へのケアの向上を目指したモデル開発および研究に取り組んでいる。